

各 位

令和2年7月1日
山形市野草園 : 山形市大字神尾 832-3
電話 023-634-4120

山形市野草園からのお知らせ



「アジサイロード」に咲くエゾアジサイ

エゾアジサイ（アジサイ科）

日本固有種で、北海道と本州北部及び日本海側の山地の斜面や沢沿いに生えます。葉は先のとがった楕円形で、縁に粗い鋸歯があり、対生します。花は水色の小さな両性花の集まりの周りに、花弁4個の装飾花を付けます。花の色は青色系統と赤色系統があります。

梅雨の季節に入り、野草園の夏の花たちは美しい姿を見せてくれています。園内のスギ林を東西に走る「アジサイロード」の両側には水色のエゾアジサイの花が咲き誇っています。一方「ひょうたん池」にはたくさんのオゼコウホネとスイレンが咲き、湿地の「水辺の花コーナー」では赤紫色のノハナショウブが鮮やかに咲いています。

夜には町中では見ることの出来ないホタルたちが、野草園内の小川と湿地に現れています。

《 開園時間短縮のお知らせ 》

6月1日～8月31日は午前9時から午後6時まで開園予定でしたが、新型コロナウイルス感染症対策及びクマ侵入に備えた安全確保のため、午前9時から午後4時30分までの開園時間とします。尚、入園は午後4時までです。

※9月以降の開園時間も午前9時から午後4時30分（入園は午後4時まで）となります。

- ◆ 5・6月に引き続き、7月上旬の全てのイベントは中止といたします。
- ◆ 「自然学習センター」と「カフェやまぼうし」は、7月2日から再開します。
換気や人が触れる物のアルコール消毒を十分におこなっていきます。また、テーブル、イスを減らし、十分な間隔を取れるようにしています。

来園前にホームページ又はお電話でご確認ください。

(<https://www.yasouen.jp>) (023-634-4120)

●●●7月前半に見られる主な花たち●●●



オゼコウホネ(スイレン科)

水の中から顔を出した黄色い棒付きキャンディー、そんなイメージのオゼコウホネです。花のまん中にある雌しべの柱頭盤が赤く、とても綺麗です。尾瀬、月山の湿原、そして、北海道の一部にしか自生しない、隔離分布の貴重な種です。氷期の生き残り（遺存種）と言われています。



ヒツジグサ(スイレン科)

花の直径は5cmほどと、スイレンに比べるとずっと小さいですが、日本に自生する花です。ヒツジグサのヒツジとは、“未(ひつじ)の刻”(午後1時～3時)のことです。未の刻頃に花が開くからこの名前がついたといわれています。



スイレン(スイレン科)

水底の土中に根と地下茎があり、葉と花は水面に浮きます。スイレン属は花が美しいのでよく栽培されます。葉の形は円形で一方が深く切れ込み、花弁と雄しべは多数あり、雌しべの柱頭は放射状になります。「睡蓮」の名は「朝に花が開いて夜に閉じる」つまり、睡る蓮ということでした。



トビシマカンゾウ(ワスレグサ科)

飛島、男鹿半島、佐渡島の海の近くに生える草丈が1～2mの多年草です。一足先に開花したニッコウキスゲを一回り大きくした感じです。花は1日花で、黄橙色の6弁花を茎先に10個程次々に咲かせます。酒田市のシンボルの花がトビシマカンゾウです。



スモークツリー(ウルシ科)

初夏に花を咲かせる雌雄異株の落葉樹木で、ヨーロッパから中国にかけて分布します。小さな淡緑色の花を穂状にたくさん咲かせ、雌株の花後にタネを結ばない花(不稔花)の軸の部分が長く伸びて羽毛のようになります。花穂の見た目がもふもふした感じになり、離れてみると煙のように見えます。



ヤナギラン(アカバナ科)

花が美しい蘭に、葉が柳に似ていることが名前の由来です。山地の日当たりのよいところに生える多年草で、山野が工事跡などで荒れると進出し木が茂ると姿を消す先駆植物です。茎の先に多数の紅紫色の花を開き、下から上へ咲き上がります。夏の終わり頃には、白い綿毛を穂全体からいっばいに出し、その様子もまた見事です。



アカバナシモツケ(バラ科)

茎の先に、小さな紅色の花をたくさんつける多年草です。ひとつひとつの小花からは、多くの雄しべが長く伸びて、全体的にふわっとした感じに見えます。葉は5つから7つに深く裂け、また、鋸歯があるので、モミジの葉のような印象です。接写で撮影することがおすすめです。



ウツボグサ(シソ科)

日本各地の山野の草地に普通に見られる多年草です。うつぼ（靱）とは、その昔、武士が矢を入れて背負った武具のことです。この植物の花穂がそれに似ていることが名前の由来です。夏の盛りには枯れてしまい、茶色くかさかさの状態になります。そんな様子から、“夏枯草（かこそう）”とも呼ばれています。枯れた姿も印象的です。



ホタルブクロ（キキョウ科）

山野に生える草丈30～80cmの多年草で、茎の上部に長さ4～5cmの釣鐘状の花を釣り下げます。花の萼片の間には反り返った付属体があります。花色は関東では赤紫色が、関西では白色が多いそうです。本園には両方とも咲いています。名前は花にホタルを入れて遊んだことに由来するようです。



オカトラノオ（サクラソウ科）

山地や丘陵などの日当たりの良い草地に生える多年草で、茎は直立し分岐しません。茎の先に一方に傾いた総状花序をつくり多数の白い花を密につけます。名前は、その花序を虎の尻尾に見立て、丘などの草地に生えるのでついたようです。



クガイソウ（オオバコ科）

山地の日当たりのよい草地に生える多年草です。葉は長楕円状披針形で、4～8枚が輪生して数層となります。茎の頂きに穂のような長い総状花序をだし、多数の花を開きます。青紫色の花は下の方から順次上の方に咲いていきます。名の由来は多層に輪生する葉の様子からつけられたようです。



カライトソウ（バラ科）

山の草原に自生します。草丈は50cm～1m、茎は上の方でよく枝分かれます。葉は楕円形で、縁に波形のギザギザが入ります。花茎に4～10cmの花穂がつき、先端から根元に向かって小花が咲き進みます。目立つ花弁はもっていませんが、雄しべ（花糸）が紅紫色で1cmほどの長さがあり、花の外に突出したような感じになります。



キンコウカ（キンコウカ科）

山地帯～高山帯の湿地や湿原に生える多年草で、群生して咲きます。葉は中脈から折りたたまれています。花茎は高さ20～40cmで総状に多数の黄色い花をつけます。開花すると雄しべの花糸に縮れ毛が密生します。花後、花被片は緑色になります。名は花色から「金光花（キンコウカ）」とつけられたようです。



クマノミズキ（ミズキ科）

山地の林に生え、高さは8～12mです。葉は枝に対生し、形は楕円形で縁は全縁です。裏面はやや粉白色です。花期はミズキより1ヶ月遅く、新枝の先に散房花序をつけます。たくさんの白色の小さな花は4弁花です。秋になると果実は黒く熟し、果柄は赤く珊瑚のようにも見えます。名は三重県熊野に産するミズキの意味です。



オオバギボウシ（キジカクシ科）

山の草地や林内に生える多年草です。葉がハート形で非常に大きく、長い柄があり基部は心形になっています。花はわずかに紫色を帯びた白色で横向きにつき、そのつぼみの形が橋の欄干の飾り物「擬宝珠」に似ているのでこの名がついたようです。山形では「ギンボ」と呼ぶそうです。